

日本の中東研究が戦後の分断されたイラク社会を救う！

千葉大学提供
作成日 2016年3月16日
更新日 年 月 日



研究者氏名 さかい けいこ 酒井 啓子	所属機関 千葉大学法政経学部	関連キーワード(複数可) イラク、中東、紛争、宗派対立、アイデンティティ、ナショナリズム、国際政治、比較政治
主な研究テーマ ・中東、特にイラクの現代政治、紛争、アイデンティティに関する研究 ・ナショナリズム、宗派意識が暴力的紛争に発展する原因の究明	主な採択課題 ・基盤研究(A)平成24～27年度(配分総額:43,940千円) 課題名「現代中東・アジア諸国の体制維持における軍の役割」 ・基盤研究(A)平成21～23年度(配分総額:47,190千円) 課題名「現代中東・アジア地域における紛争・国家破綻と社会運動」 基盤研究(A)平成18～20年度(配分総額:47,190千円) 課題名「現代アジア・アフリカ地域におけるトランスナショナルな政治社会運動の比較研究」	

① 科研費による研究成果

イラクを始めとする中東諸国の多くでは、近年紛争などの暴力的衝突が蔓延している。

- ・本研究が追求し続けてきたのは、その紛争の原因究明と、解決方法の模索である。
- ・そのため、過去三件の科研費事業において、紛争要因として重要と考えられる越境的な宗派意識や政治思想の実態、政治変動の結果発生する国家破綻化のプロセス、そして正規・非正規の軍事組織の役割を研究対象として取り上げ、解明を試みってきた。
- ・特に力点を置いたのは、紛争経験国の現地出身の研究者との直接の研究交流である。そのため、中東の現地(レバノン、エジプト、イラク)で日本の中東研究者と現地研究者の国際ワークショップを繰り返し開催し、一次データの取得など大きな成果を上げてきた。

② 当初予想していなかった意外な展開

・中東現地諸国との研究交流の過程で、特にイラクとは、2003年のイラク戦争以来、バグダード大学との間で密な研究ネットワークを構築してきた。2005年以来、ほぼ毎年のように共同国際シンポジウムを開催してきたが、治安上の理由により、その多くは日本国内で開催されてきた。しかし、イラク南部の工業地帯には日本企業も地道な復興活動を続けている。日本への期待感の強い土地柄だった。

・そのバスラで、2015年12月、在イラク日本大使館の協力を得て、イラク国内で初めて、国際シンポジウムが開催されたのだ。バグダード大学の先生方が、現地のバスラ大学の協力を仰いでくれた。その結果、開催地バスラのみならず、イラク国内全土で大きな話題を呼んだ。その様子は、イラクの大手日刊紙に一面で取り上げられた。

<http://www.azzaman.com/qpdfarchive/2016/01/12-01/P16.pdf>

日本でも、NHKがその様子を取材した。

<http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/900/236044.html>



バスラ大学文学部長らと(2015.12月)

③ 今後期待される波及効果、社会への還元など

・2015年のバスラでの日・イラク共同国際シンポジウムが成功裏に開催され、初めての日本・イラク間の学術交流が現地で実行できたことで、両国間の外交関係を促進する上でも大きな影響を与えた。会議にはJICAなど実務機関も関与し、日本企業の間にも関心が高まったため、今後の日本のイラク戦後復興へのより深い関与が期待できる。そのことは、本研究の究極的な目標である紛争の解決に寄与するものとなる。

・研究成果の面でも、現地研究者とより深いつながりを構築できたことで、現地からの一次資料の入手やファーストハンドの調査を遂行できる可能性が広がった。同時に、イラク国内の若手研究者に日本を通じた国際水準の研究を紹介することができ、戦後イラクの知的発展に大いに貢献できたと考える。今後、こうした若手イラク人研究者は、戦後のイラク社会の再生にも大きな役割を果たすはずである。